

切れたロザリオ



お盆前の暑い日、長女が婿さんと四国からGMのワゴン車でやってきた。例年は孫の男の子一人を乗せて来ていたのだが、今年はそれぞれ大学、高校の受験を控えていることと鹿児島より魅力的な東京に二三日行くことにしたという。親が連れて回る年頃はもう終わったようだ。

今年は何さんがゴルフを始めたといつので、夫も一緒に回るのを楽しみにしていた。翌朝はもう連れ立ってゴルフ場に出掛けていた。疲れているだろうとどつやら婿さんも凝り性らしい。

私は婿さんの車のゆったりとした革製のソファに揺られてのドライブが楽しみなのだ。この夏は、長島から天草に行ってみたいと思っていた。二日目の

早朝からを予定していたのだが、ゴルフの後の一杯が長引いて、翌朝の出発は九時を回っていた。

長島の蔵之元の静かな佇まいに心を残しながら、フェリーで牛深に渡った。西海岸に沿って崎津を通る。入江の浜に二三十人が海水浴を楽しんでいた。見慣れたカラフルな水着や帽子は一つもなく、紺や白の昔風な水着やパンツの人ばかりであった。何か五十年前の私の子供のころの海辺を思わせる素朴な風景が、懐かしさを誘った。

開発の手の入らない急カーブの海岸線の美を楽しみつつ、大江で昼食にした。居合わせた客に出された巨大な海老天の載った天井に未練を残しつつも、海岸なのだからと寿司を注文した。そしてサザエのコリコリした食感や名前も知らぬ新鮮な魚の大ぶりのネタに一応満足した。

そのあと少し走って道脇のロザリオ館という新しい記念館に入った。隠れキリシタンの遺物の展示や屋根裏部屋集会所の復元などのあるこじんまりとした会館だった。映写室では大江天主堂と郷土の紹介

を大型スクリーンでやっていた。私は普段は縁のないロザリオという語にふと四十余年前に貰ったロザリオを思い出していた。

学生時代、短い間ではあったが父の恩師の息子さんの家に下宿したことがあった。空襲で焼野が原になった東京の、復興は未だしの住宅事情の悪い時代であった。そこには奥さんの姪、ごさんも下宿していた。外資系の商社に勤務していた彼女は、むき立てのゆで卵のような汚れない純粹な心優しい人だった。熱心なカソリック信者で、一度上智大学の教会に連れて行ってもらったことがあった。十字を切ったり小腰を曲げたり作法など彼女を真似ることだけで終始してしまつたが、隣に席を取つた子供連れの若い駐留軍将校の妻の美しさが印象に残つた。伏せた目のアイシャドウは童色の服と同系で、褐色の長く濃い睫毛が形よく反り返っていた。

帰りに彼女は白い玉を運ねたロザリオを記念に買つてくれた。教会には一度と行くことはなかつたがそのロザリオはアクセサリーと一緒にずっと私の手

元にあつた。いつか鎖は切れてしまつていたが。しかし四年前、東京から鹿児島に移つて来た際はそれをアクセサリー入れには収めなかつた。チヨコレートの缶に父のセイロン土産のネックレスなどと一緒に入れた筈だがその缶の所在があやふやである。何か落ち着かぬ気持ちになつた。

車に戻つて少し行くと左手の丘の上に大江天主堂が見えた。海岸線の道をロザリオの鎖と見立てれば点々とあるキリシタンの遺跡や天主堂はその玉かも知れない。

ロザリオの鎖の白き玉かとも

天草の入江の古き天主堂

ともかく天草を一周してほしかつたので、今回は立ち寄らずに先を急いだ。下田から島を横断した方が本渡まで近いと婿さんは言ったが、私は海岸線を行くよう頼んで、苓北町まで行つた。その頃になると睡眠が襲つてきていつしか眠ってしまったので、どの道を行ったのかさだかではない。遠回りさせて婿さんには悪いことをしてしまつた。

いつか本渡も過ぎていて、婿さんが停車したのは有明町の道の駅「リップルランド」だった。

小高い丘の上にあるリップルランドは、トイレや脱衣場が完備していて、下の浜で泳いで来たらしい若い男女が行き交っていた。土産物売り場も大きく私もわかめや干し蛸を買った。対岸にはうつつすらと雲仙普賢岳が浮かんでいる。海もバステルカラーに凧いでいた。もう四時を回っていた。

地図によると松島港までは二十分。そこから八代までフェリーで行って帰宅する予定だった。夫に急かされて、車に乗ると道はもう数珠つなぎの渋滞になっていた。考えてみると生憎その日は日曜日だったのだ。二十分のところが一時間かかって松島港についた。最終のフェリーは五時半で、出航までにはまだ十分以上あったのだが、もう船は一杯で乗船出来なかった。婿さんはすぐに姫戸まで車を走らせた。しかしその船着場は人影ひとつなかった。あわてて牛深に電話すると、最終は七時半だがそこからでは到底間に合わないという。ふと鳥流しの目にあっ

た心境になった。

観念して又取って返して天草五橋から宇土平島を経由して帰ることにする。夕闇が迫るころ渋滞の中を五号橋、四号橋と渡った。

途中のコンビニの店でそれぞれ好みの夕食を買った。お疲れの婿さんにはドリンク剤をサービスしておく。

三角で南側の道に入ると、やっとスムーズに流れるようになった。十時過ぎには帰宅出来るだろう。窓外の町の灯を眺めながら、またあの古いチヨコレート缶はどうしただろうと思った。ガラクタも滅多に捨てない私なのだがこの頃ふつと大事なものも捨てたりしている。

定年前には、読書や懐旧にぼんやり過ごす老後を想像していたのだが、何故か今の処は結構忙しい毎日なのである。